

一、俠客伝先便に一寸申上候様に覚候。大阪にてはり立候すり本、十二月廿日に着の処、右すり本に間違有之、惣もくろく半丁、江戸にてはり直し候故、うり出し意外ニ及延引候。其上表紙に紫色すり入候故、快晴打つゞき不申候はねば、表紙やにてはり立候事成かね、正月中より今以日々雨天がち故、これも延引、やう／＼当月十五日、雨中にうり出し申候。……

一七 「天保三年」四月二十八日

一 壬辰日記「三月五日」

一、大坂河内や茂兵衛状、飛脚やより届来ル。二月廿五日出十日限早便也。二月八日出にて申遣候、三才発秘落丁拾壹枚程中ニ入置指越之。右ハ茂兵衛方ニ同書一部有之候ニ付、又キとり寄越候もの也。自序の落丁ハその本ニも無之間、断候旨申ル。且同人三月五日頃出立ニ唐品仕入ニ長崎へ罷越、五月節句前後、江戸出府の心かけニ罷在候よし、申来ル。

二 殿村篠斎よりの依頼。(天保三年三月一五日書簡、同二四日馬琴落手。四月二八日馬琴返簡、五月六日篠斎落手)。四月二八日付馬琴書簡(堀内快堂「曲亭書簡集」所収)

一、醒世恒言・連城壁・冷山平燕御入用に付、此地書肆をも心がけ有之候はゞ、先直段等早々申上候様御頼之趣承知仕候。当地書肆英平吉没後は、芝神明前岡田やより唐本買入候。然ル処遠方に付平生疎遠に御座候。其上岡田やは評判の高直やに御座候に付、無拋義に無之候ては注文不申遣候。尤それにも不限候間、心がけ有次第可申上候。近來小説もの直段、二三十已前とは半分余も高直に成候。寛政の末より文化中は、追々俗語小説ものかひ入、五六十部にも及び候処、其節は石点頭代金壱方・笠翁十種曲代拾貳匁・漢楚演義代金壱方貳朱・李卓吾山中一夕話代金壱方・平山冷燕金壱方・醉菩提金貳朱・金翹伝代九匁・西廂記点付候本代金壱方、すべて此位の直段にて購得候処、只今は其節代金壱分なりしもの、貳分にて手に入かね候。寛政中にや獮園を金壱分にてかひ入候処、山本法眼御所望に付進上いたし候。此節見たく思ひ候間、去年岡田よりとりよせ候処、帙なしにて代金貳分貳朱に御座候。先年より壱分貳朱高直に成候。是を存候へば、小説ものそのまゝさし置可申に、文化の末より見識かはり、小説ものはうつとうしく覚候間、追々有用の他本と交易いたし、只今は三ヶひとつも無之、只端本など少し残し置候のみ、をしき事をいたし候也。其節は小説をよみ立候而、趣向に用ひ候より新に趣向を案じ出し候がはやく候故、只なぐさみに見候のみに御坐候間、貪着不致候処、近來は又元の麓へ立もどり、俗語小説も有

益不少事御座候間、又ほしく成り、少々ツ、かひ入候半と存候へば、高直に付手のとどかぬもの多く御座候。なまじいに前々の直段を存居候故、まざら高直のものかひ入がたく、殊に書は衣食住の外故、囊中不統毎々齒を切り候事多く御座候。御一笑可被下候。

なお「平山冷燕」(二〇回)四冊(清・荻岸山人編)については、後出 二八 天保五年二月二八日書簡参照の事。

### 三 壬辰日記(四月二十六日)

一、予八犬伝八輯六の巻十三丁迄写本校訂、昼前校し早。昼飯後より松坂小津新蔵へ遣し候春來両度之廻翰毫通、并ニ大坂河内や茂兵衛に遣し候二月中の再答書、及俠客伝撰写書抜き、右状中へ封入、又同書大坂にてハ、八冊ニとちわけうり出し候よし、松坂との村氏より申來候ニ付、それらのかけ合件々要領認之、終日也。小津へ之状ハとの村へたのミ、一封ニいたしおき、河茂への状ハ、八日限早便ニいたし、明後廿八日、飛脚や嶋迄へ出し候つもり、との村状ハ、大伝馬町殿村店是又廿八日ニ遣し候様、宗伯へ申付おく。夜ニ入休息、今夕例よりはやく五時過就枕。○今日ハ又冷氣ニて老人綿入一ツにてハ猶寒し。

### 一八 「天保三年」九月一六日

一八 「天保三年」九月一六日

### 一 壬辰日記「九月七日」

一、昼前丁子や平兵衛より小ものを以、大坂河内屋茂兵衛状届来ル。八月廿七日出六日限早便、外状幸便ニ付近着也。右ハ紀州名所図会、今般飛脚便ニ丁子やに向ケ出し候よしの案内、并ニ七月中申遣候西廂記、琵琶記落丁之事、横山町老丁め和泉や金右衛門方へ、右同書遣し置候間、申遣し、引かへくれ候様申来ル。

### 二 壬辰日記「七月二日」

一、夕七時比大坂書林河内や茂兵衛、明日帰坂出立のよしニて来ル。余対面過日やくそくの唐本西廂記代金沓分沓朱のよし、琵琶記代金沓分式朱ニて、仲ヶ間売直段のよしニて持参せらる。まづ請取おく。要談早て早々歸去。

### 同「七月三日」

一、予西廂記一の巻・琵琶記一の巻共ニ二冊繙閱。西廂記一ノ巻二の巻ニ落丁有之。追て其段大坂河茂へいひ遣スへし。

### 同「九月八日」

一、右同刻(昼前)丁子や平兵衛より手代を以、要用向聞せニ差越、且昨日頼置候横山町一丁めいつミや金右衛門よりとりよせ候古本琵琶持参、西廂記ハ無之間、近日とりよせ上